

# 特集

## 新規層拡大のために：

### 「花山天文台特別公開ウィーク」における新たな試み

玉澤春史（京都大学理学研究科附属天文台）

#### 1. はじめに

本稿は 2013 年 9 月に行われた京都大学理学研究科附属花山天文台の一週間におよぶ一般公開での取り組みについての報告である。

これまでの一般公開や見学などの取り組みよりも幅広い取り組みを新たに行うことができ、新規層へのアピールをすることとなった。これは運営側・来場側双方にとっていえることであり、今後のさらに発展的な活動の基礎を作ることができたといえる。

#### 2. 契機

京都の東山に位置する花山天文台は 80 年以上の歴史を持つ天文台である。積極的に一般向けの活動をしてきており、毎年秋に行う一般公開や、学校・団体単位の見学なども行っている。さらに天文台を支える NPO（花山星空ネットワーク）主催の観望会なども含めればかなりの人数が訪れることになる。例えば 2012 年においては、秋の一日に定員 500 人で実施される一般公開の他に、学校他の団体見学が 1000 人以上となっている。[1]。

歴史ある天文台であるので、観測ドームも建築史的価値を持つようになってきた。2013 年 1 月には「京都を彩る建物や庭園」に選定された[2,3]。

一方で、京都大学内外のイベントにおいて天文台教員とミュージシャンの喜多郎氏との交流があり、「花山天文台で野外コンサートを」というのがいつのころからか企画にあがっていた。

以上のようなこともあり、今年是一般公開を通常の日から一週間に拡大、最終日

は喜多郎氏の野外コンサートで締めるという「花山天文台特別公開ウィーク」が実施されることとなった。

様々な状況から、9/22 をコンサート開催日として、その日をフィナーレとした一週間で計画が立てられた(表 1)。

表 1 「特別公開ウィーク」の開催日程

9/16 (月祝)	一般公開 (例年規模) * 台風の影響により中止
9/17 (火)~20 (金)	平日公開週間
9/21 (土)	準備のため休み
9/22 (日)	野外コンサート

前の週には東北大学での天文学会秋季年会、また 11 月には天文台がホスト役の太陽物理学の国際会議「ひので 7」があり、例年よりも時間のない中で、早い段階からの準備が必要であった。例年の一般公開であれば、後期が始まった秋の週末に一日ということで、天文台の職員や所属する大学院生のほか、NPO 会員、学部生のボランティアなど様々な方々の協力で乗り切っているが、平日も含めた一週間となるとマンパワーが圧倒的に足りない。またコンサートなどこれまでにない企画も実施するため、入念な事前準備が必要である。これまでとは違った方面への協力要請が必要になってきた。

一方で天文台でのコンサートなど、これまでの天文台来訪者とは違った層が期待されるわけであり、この機会に様々な取り組みによってこういった層にアピールしていくことも可能になるため、別途企画も立てられていった。

### 3. 試みの具体例

4月以降本格的に準備会合が断続的に開催されていった。すべての案件が最初から出そろっていたわけではなく、必要に応じて対応したり、また議論の中から急きょ対応していったものもでてきたりと、日程が近づくにつれ規模が拡大、それにともない内外からの参加者も増えていった。

初日である9月16日は台風の影響により残念ながら中止となったが、翌17日からは台風一過の済んだ空の元開催されることとなった。以下、取組みの一部であるが、「協力体制」「新規性」が目立ったものを個別に取り上げる。

#### 3.1 専門学校生によるポスター制作

例年、宣伝用のフライヤー（ポスターおよびチラシ）は天文台の職員がデザインしたものを使用している。今回は元天文台職員であり、NPO会員、そして専門学校の職員である磯田安宏氏の提案により、京都デザイン専門学校の学生の皆様に制作してもらうこととなった。授業課題として案を出してもらい、優秀作品を実際に宣伝用フライヤーとして利用させてもらった。教育機関や大学内外に広く配布されるものを学生段階でデザインできるというのはまたとない機会であり非常に有用である。天文台側としても、専門に活動している人間に作成してもらうことは願ってもない機会である。

4月に企画がスタートし、天文台の写真など素材提供などを行い、5月段階で計9点のアイデアが出てきた。制作チームのプレゼン、台内の意向調査などの結果、最終的に1案に決まり、それからブラッシュアップを重ねていった(図1左)。例年の宣伝フライヤーとは一味違ったものとなった。



図1 (左) 特別公開ウィークのフライヤー (右) 洛北高校生成成の小学生見学用資料

#### 3.2 教育委員会との協力体制

今回の一週間に及ぶ公開での懸念材料が、ボランティアの方をどのようにして集めるかということであった。例年は秋の週末一日だけであるので比較的人を集めるノウハウがあったのだが、平日となれば社会人の方は難しく、また9月開催ということもあり学部生の募集もしにくかったのである。

これを解決することになったのが、それまで協賛や各種イベントで協力してもらった京都府および京都市の教育委員会である。

一般公開週間当日には運営スタッフとして参加していただいた。また企画段階から様々な観点から助言、助力をいただいた。宣伝や企業協賛など、これまでにない点からも尽力いただいております、新たな縁も形成されることとなった。また、物資についても京都市の行事で使用する用具を借用するなど、普段自分たちでやっていた部分についても省力化することができ、準備がだいぶ楽になった部分があった。これは次回以降も利用できればと考えている。

#### 3.3 小学校の見学対応

公開期間中の平日(17日~20日)は、午後に一般向けの公開を設定しておいたが、それに加えて午前中に近隣の小学校による見学を設定した。例年も一般公開期間外の

平日などに対応しているのだが、この機会と一緒に対応してしまおうということである。特に京都市教育委員会のバックアップにより可能になったものである。グループごとに各施設を順番にめぐっていく形式で行った。前節のように教育委員会からも人を派遣してもらったが、それ以外に一部日程については授業の一環として京都市立堀川高校の学生に案内役を務めてもらうこととなった。

### 3.4 高校生との協力体制

前節の通り高校生による案内・解説の機会が設けられたのだが、これは自分たちで解説内容を考え実行するという一方で、堀川高校の教育方針に沿って企画されたものである。

事前に柴田一成台長が高校を訪問し出前授業をしたのち、自分たちで解説内容を決めて、資料作成も行ってもらった。当日は穴埋め式の資料(図 1 右)を配布するなど、単純に見るだけでなく印象に残るような工夫を随所に内容で行ってもらった。

### 3.5 喜多郎氏野外コンサート

特別公開ウィークの最終日となる 9 月 22 日は天文台の敷地内をコンサート会場とする野外コンサートとなった。一般公開同様、無料イベントであるが、機材搬入やステージ構成など、断続的に関係者が天文台でのチェックを行った。

特設ステージや照明などの費用は、協賛金を募るという形式で捻出していった。直接の依頼もあったが、ここでも教育委員会を通じて京都の企業などに協力依頼が可能となった。

当日は台長の柴田のほか、門川大作京都市長のあいさつのあと、宇宙科学の映像と喜多郎氏の音楽を融合させた「古事記と宇宙」の DVD を天文ドームの壁に投影した。

太陽フレアなどの動画を大画面と迫力ある音響で楽しんでいただけたかと思う(図 2 左)。

コンサート本編は天文ドームの回廊などで演奏をするという演出で、天文台の利用として新しい一面をみせたかと思う。

### 3.6 花山天文台 Galleryweek

一般公開と同時開催する形で、衛星の取得したデータを芸術作品の素材として利用し作品制作、観測ドーム内などを展示場所として展示する企画「花山天文台 Galleryweek」を開催した[5]。これまでも京都大学の宇宙総合学ユニット(宇宙ユニット)などの活動に宇宙とアートに関するものもあったが、天文台の活用や地域作家への展示場所提供といった側面も含めたいうえで、単なる展示にとどまらない方法を模索していった。

また、期間内の 18 日には、天文台の利用方法や学術データの芸術利用などに関するワークショップを行い、より学術的、実践的な検討を行うなど、研究施設としてのアプローチも行った(図 2 右)。

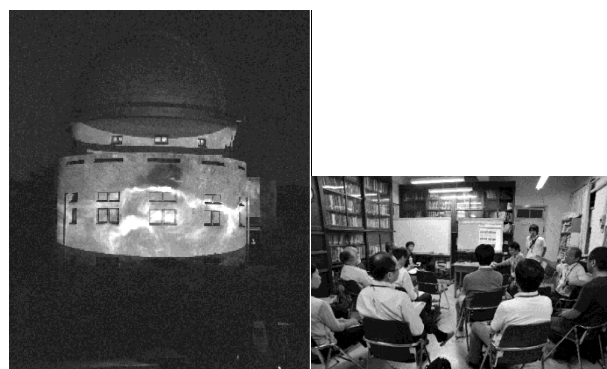


図 2 (左) 天文ドームに投影された映像 (右) ワークショップの様子

## 4. 印象的だった声

初日が台風の影響のため中止になったとはいえ、明けて火曜日からは台風一過できれいな空の下平日公開、コンサートを迎え

ることとなった。

運営側としては教育委員会の方々や堀川高校の学生の皆様など、いままでの一般公開とは違った層の協力体制が構築され、これも含めて天文台と教育関係との協力関係も強くなっている。一例として 2014 年 2 月の天文台と宇宙ユニット主催のシンポジウムでは、高校生への積極的な参加を促すため企画段階からも様々な助言をいただいている[6]。

参加者の声は多種多様だが、分かりやすいのは Galleryweek の出展作家作品やコンサートの喜多郎氏など、天文ファン以外の来台者があったことである。意識して参加しない限り普段天文ドームや望遠鏡など見る機会はないわけで、これまでとは違った層へのアピールにはなったようである。一例としては、コンサートにおいて目の不自由な方が参加されており、まさにこういった機会がなければ来ることがなかったであろう。

普段の一般公開よりも注目度が高かったこともあり、「50 年ぶりに来ました」というような声もきかれた。歴史ある天文台ならではの声かと思う。

## 5. おわりに

一週間に及ぶ一般公開という花山天文台としては初の試みであったが、様々なとりくみにより注目を浴び、なんとか終了することができた。

コンサートや作品展示、あるいは高校生や専門学校生の協力など、様々な立場からの参加があったのだが、いずれも天文ファンという側面ではない来台者である。単純な知識・興味としての天文・宇宙ではなく、音楽や芸術、教育の題材として宇宙を使ってもらった。他の分野とセットにすること

で新たな試みが生まれ、また他分野に興味がある人からも見てもらえる。このような方式は以前から指摘されていたことであるが、実際に行ったことからその効力は有用であり、今後も同様の試みは積極的に行うべきである。

これまでよりも広い層に協力をいただいたが、何もなかったところからではなく、大小さまざまな交流から生まれてきたものであり、個人的なものも含め、人的リソースの確保は絶え間ない交流から生まれる。また、これを契機にさらに多方面への交流が生まれることで、恒常的な相互協力体制を構築することが今後の課題である。

最後に、今回の特別公開ウィークに関わった皆様にこの場を借りてお礼申し上げる。

## 文 献

- [1] 京都大学大学院理学研究科附属天文台『年次報告 2012 年』
- [2] [http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news\\_data/h/h1/news7/2012/130131\\_1.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news7/2012/130131_1.htm)
- [3] <http://www.city.kyoto.jp/irodoru/yamashina/kyoutodaigaku-kazantenmonda.html>
- [4] <http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/education/open2013kwasan/>
- [5] <http://rs.usss.kyoto-u.ac.jp/galleryweek.html>
- [6] <http://www.usss.kyoto-u.ac.jp/symposium7.html>

玉澤 春史